

史料

江戸時代旅宿物語 (一)

「江戸時代の道路を往く」の續篇

渡部英三郎



— 本 號 目 次 —

- 一、宿場情景（旅宿の一般的發達）
- 二、江戸幕府成立當時に於ける旅宿の面影

一、宿場情景（旅宿の一般的發達）

一日の行程を旅し續けて來た旅人等は、薄暮蒼然として
 迫る頃、豫定せる宿場の町が、暮色にかすんで間近かに展
 開して來るのを眺めると、何時か疲勞を忘れて道を急い

だ。「東海道中膝栗毛」の著者（享和年）が

此渡（註）富士（川の渡）を打ちこえけるに、はや日も西の山の端

にちらつき、おのづから道急ぐ馬士唄の、竹にとまる雀
 色時、やうく蒲原の宿にいたる。

と書いてあるのは、今し宿場へ辿りつかうとする當時の旅
 人等の情景を偲ばせるに充分である。當時主要な街道筋に
 繁盛してゐた多くの宿場は旅行者にとつて單なる宿泊の場
 所ではなく、同時に好奇に充ちた旅情のまゝに身を委ねて

一夜を過ごす愉樂の場所にまで發達してゐたのである。

わざとおのれ一人の心を喜ばしむるも、皆ともに驛路の小ざぐれ(註) (ものづき) 相宿の木枕に結ぶ縁は出雲の帳外：

…(東海道中
膝栗毛)

などゝある戯れ文字にも、江戸時代の宿場々々を彩つてゐた淫蕩な零圍氣が窺はれる。遠く故郷を離れて、困苦しき道德の型から解放された旅人等が、宿場での一夜を如何に過ごしたかは「旅の恥はかきすて」の流行語がその時代に發生したらしき事實によつても想像されるであらう。

旅宿や茶屋の軒々に懸けられた家號入りの軒燈が宿場の街衢をほの明るく照らす頃、東西から到達せるいろとりどりの旅人等は、媚かしい宿の女(飯盛女)の嬌聲に迎ひられてそれ／＼の旅宿へ吸ひ込まれた。東海道中膝栗毛が程ヶ谷の宿で、旅宿の女等が客を呼び招する有様を描いて……はや程ヶ谷の驛につく。兩側より旅雀の餌鳥に出しておく留女(註) (客引の女)の顔は、さながら面をかぶりたる如く眞白にぬりたてゝいづれも井の字がすりの紺の前垂

れをしめたるは、扱てこそいにしへ、爰は帷子(かたびら)の宿といひたる所なんと聞えし。旅人を乗せたる馬士なまけたる聲にて

ふじの人穴馬でも入る。なぜにお方にや穴がない。ド

ウ／＼

とめ女「馬士お泊りかな」

馬士「イヤ旦那は武藏屋だが、お前の顔を見たら、それ

此畜生めが泊りたがらア。それそれ。」

馬ヒヒン／＼と行過ぎると、又あとより旅人二、三人。

とめ女「もしお泊りかへ」と引きとらへて引つぱる。

旅人「あれ、手もげらア」

とめ女「手はもげててもようございます。お泊りなさいませ」

せ

旅人「ばかアいへ、手がなくつちやお飯(いんぱん)が食はれねえ」

とめ女「お飯のあがれねへ方が、おとめ申しちや猶勝手

さ」

旅人「エ、いめへましい。はなさぬか」とやう／＼ふり

切つて行くと、又後から来る旅僧

とめ女「お泊りかへ」

旅僧、此女のかほを見て

僧「イヤもちつと先へ参らう」

夕暮れ頃の一時の宿場の情景偲ぶべきものがある。「東海道中膝栗毛」の書かれた當時より百餘年をさかのぼつた元祿時代頃にも、既にこうした情景は宿場の町々に展開してゐたものと見え、その頃、和蘭使節の江戸参府隨員として長崎から江戸への旅を二回繰り返し、日本の社會文物に關して鋭い觀察を下したケンベエルは、さうした女の存在によつて醸し出されてゐた宿場の情景を偲ばせる多くの記述を遺してゐる。

例へば

彼女等は四時の別なく常に多數に置かれ、毎日正午に近く衣装を整へ、粉黛を施して戸口の側に立ち、家の前なる椽臺、長廊に坐り、顔、聲も嬌然に、嬌しく來かゝる旅人を迎へて、一人は此處に、一人は彼處に、相競ひて

これを招じ入れんとし、旅人に寄り添へて喧しく呼びかくるなり(ケンベエル 江戸参府記行)

とあるなどは其一つだ。牧方の宿に就いて

此處には多數の旅亭、飲食店ありて、そこには小許の錢にて茶を喫し、酒を飲み、又種々の温き食物を得べし。

是等の宿屋及公衆の立ち寄る家には、各戸に化粧したる若き私娼もあり、戸口に立ち、旅人を目蒐けて呼び込みつゝあるを以て、容易にそれを知らるゝなり

と述べ、また赤阪の宿を過ぎて

赤阪は其町筋よく築きてあり、又それには多數のいと美はしき旅宿を備へ、其の旅宿には美裝したる娼婦少からず、殊に客に侍べるを要する旅宿には充滿せり

と記してゐるなどもその例である。西鶴の描寫など、比較して、遙かに美しく描かれてあるが、それは恐らくはそうした女等と、一般に教養なき旅人等との間に交はされた下卑た會話の内容が理解されなかつたからであつて、若し前に引用した「膝栗毛」の記述のやうな會話が完全に理解され

たなら、斯種の女等に關するケンペルの記述はモツト異つた色調を帯びて遺されたに相違ないであらう。それは何れにしても元祿時代頃、既に宿場が街道筋に繁盛し、其處には多くの倫落の女等が巢喰ひ、淫蕩な零圍氣が充滿してゐたことは明かであつて、そのことは此時代に於ける庶民群の旅行が既に極めて一般的な現象となり、隨つて道路交通が可なり高い發達を遂げてゐた事實を反映するものでなければならぬ。

他の機會にも述べたやうに（「道路の改良」掲載の拙稿）元祿時代頃、既に東海道筋の宿場は、殆ど例外なく、人家が連擔して街衢を成し、中には急激に膨張して相隣れる諸聚落が一つの街にまで融け合つてゐるやうな所もあつたといふ⁽¹⁾。そして其處には何れも各種の商店が無數に軒を並べ、外國旅行者をして、入戸の割合にあまりに過多に見えるそれ等の商店が、各々如何にして營業として成り立つてあらうかを疑はしめたほどであつたが、然しそうした賑やかな宿場に在つて街の中樞を形成し、中核を成すものは目抜き

の場所に廣莊な建物を並べてゐた旅宿であつたのである。「註」(1)及(2)の點は拙稿「江戸時代の道路を往く」参照の頃（元祿頃）宿場と云はず、城下町と云はず、街道筋の町々に旅宿が一般的に發達してゐたことは右に引用したケンペルの、赤阪宿や牧方の宿などに關する記述によつても窺はれるが同じ旅行者の紀行文中に、他にも旅宿の一般的發達を傳へる記述が尠くない例へば四日市について

四日市はかなり大なる市にして千以上の人家あり南海の灣に沿ひてあり。多數の立派なる旅館ありて、旅人はその望みよりでそれよく待遇せらる。是れ一つには住人は旅人を對手として其生計を營むものなるにより……

と記してあるなどはその一つであつて、千戸に過ぎない此町に多數の、然かも廣莊な旅宿が在り然かもそれが街の中樞を成してゐた有様を彷彿たらしめてゐる。

また近江の大津に宿泊して

大津は近江國初めて、最大の町にして京都からの街道

に當り、譬の如く折れたる中央の町一筋と、數箇の横筋とありて、凡そ一千の小さき農民の家と市民の家とより成れり、其間に大なる旅宿數個ありて何れも輕便なる女人を缺かさず。

と書いてあるなども、未だ半農半商の状態に在つた大津に在つても、幾軒かの廣大な旅宿が在り、多くの女を抱いて繁盛してゐた有様を傳へるものである。それから六里を隔てた石部（近江）は人戸四百ほどの村落に過ぎなかつたが同じ旅行記に

我等は此處の大なる旅宿にて晝食せるがこれは常例にあらず、何時も晝食する次の小市なる水口の旅亭は火災にて焼失せる爲めなり。

とあるを見れば、そうした村落に於いてさへも、それが街道筋に在り、他の宿場から一定の距離に在る限り、其處にも旅宿が繁盛して、四隣の貧弱な人家と不調和な光景を呈してゐたことであらう。岡崎、濱松、駿府等をはじめ重要な城下町に關する記述に於いて、旅宿についての記事が比

較的重要さを有たず、または全くそれを缺いてゐるのは、記述の重點が城地、番所、樓門、石垣、堤防等の如き、彼等にとつて物珍らしい異國の封建的施設の上に置かれたがためであらう。

獨り東海道筋に於いてばかりではなく、九州、中國地方の街道筋にも旅宿が一般に發達してゐた。例へば町では小倉に就いて。

市中の家屋は小さく低く、街路は廣く平坦にして規則正しく布き、一方は南に向ひ、一方は西に向ひたり。其間には多數の美しき旅館あり、料理店あり。……獨逸に於けると同じく費用を吝まらず構へられたるもあり。

と記して、周圍の群屋をぬきんでた高莊な旅宿が軒を並べて目抜き街を形成してゐた有様を偲ばせてゐるし、また村落では山家村につき、

山家村は大なる村にて、人家二、三百あり、人口多く、甚だよき旅舎あり、我等此處に宿れり。

と叙して、未だ街を成すに至らない。一村落到いてさへ

立派な旅宿が經營されてゐた事實を傳へてゐる。(その他城下町、宿場、街道筋、村落などを通じて、旅宿の發達を傳へる記述は隨所に見出されるが煩を避けてその引用を省略する)

然し流石に東海道筋は當時に於ける道路交通の大動脈だけあつて交通量が最も多く、隨つて旅宿もそれに對應して、他の地方に比較し、一層すぐれた設備を有ち、高度の發達を遂げてゐた。ケンペエルが東海道筋の旅宿と九州地方のそれとを比較して、

九州に於ける小旅行に於いては、其宿驛は日本に於いて大阪より江戸迄の五十六宿の如くに設備は整ひもせず、良くもあらず。

と云つてゐるのはこの二つの地方に於ける交通發達の程度を物語るものである。また、

長崎より小倉に至る西海道の小さき街道にては我が炊夫が入用のものを盡く他に於て買求めなどしたるため、宿の主人の獲る所は、僅少の報酬なりしなり。

とある記述なども、この地方の旅宿がまだ設備不充分にして、第一期的發達の状態(後文参照)を脱し切らず、貴人の要求を充たし得ない状態に在つた事實を傳へるものでなければならぬ。

(附記) 當時の旅行に於いて大名は一般にその食料等を携帯せしめる習慣であつたが、ケンペエルが特にこの地方に就いてのみ斯うした記述をしてゐるのを見れば、和蘭使節等の一行は設備が比較的整備してゐた、東海道筋の旅館などに於いては必ずしも一般大名の例によらなかつたものと見るべきであらう。

斯如く陸上交通の發達の程度に隨ひ、地方によつてその設備等に相違はあつたにしても、當時旅宿が主要な街道筋に全國的な發達を遂げてゐたことは、前に引用したいくつかの記述によつても知られるし、また、

大街道には旅舎はかなり多數に之あり、そはかなり立派なるものなり(ケンペエル
江戸參府紀行)

とある。同じ旅行者の旅宿の存在に關する一般的な記述な

どによつても知られる。

一面また江戸時代中葉の碩儒荻生徂徠が、享保年間（ベニルの江戸参府より二、三十年の後）當時重大な社會問題化しつゝあつた武士階級の貧困化の原因を論究して、それを彼等が制度のためにいふ知行所を離れて、都市生活を餘儀なくせられてゐる事實に歸し、そして、彼等のそうした生活を、繰り返して「旅宿」生活に譬へてゐるなども、旅宿の存在が既に全國的な現象となつてゐた事實を示すものである。

諸大名一年代りに御城下に詰居れば、一年挾みの旅宿也。其妻は常に江戸なる故、常住の旅宿也。御旗下の諸士とも常に江戸にて、常住の旅宿也。諸大名の家中大形其城下に聚居て、個々の知行所に居らざれば、旅宿なる上に、近年は江戸勝手の家來次第に多く成る。是等の如き總じて武士と云はるゝ程の者の旅宿ならぬは一人も無。諸國の民の工商の業をする者、棒手振、日雇取などの游民も、在所を離て御城下に集る者、年々に彌増して、旅宿をも旅宿と心得る時は物入も少きことゝ成るを、

江戸中の者旅宿と云ふ心は夢にも着ず、旅宿を常住と心得る故、暮し物入莫大にして、武士の知行は皆商人に取らる也。……畢竟は箸一本にても、錢を出して買調へざれば不叶こと成故に、如此成たる也。是のみならず公儀の御身上も同じく旅宿の仕掛也。其子細は何も彼も皆其物の御買上にて、御用を辨ぜらるゝに依て旅宿也。

〔政談〕「日本經濟大典」第九卷所收

と記しました、

金にて諸事の物を買調ねば、一日も暮されぬ故、商人無くては武家は立ぬ世。諸事の物は皆商人の手にあり、夫を金を出し貰ひ請て用を辨ずることなる故、直段の押引はあれども、押買はならぬことなれば、畢竟直段は商人の云次第にて、何程にても急なる時には買はねばならぬこと、是武家皆旅宿の境界なる故、商人の利信を得ること、此百年以來ほど盛んなることは、天地開闢以來異國にも日本にも無こと也。（同上）

と記してあるなどがそれである。以つて旅宿が既に全國的

に發達し、街道筋に於ける顯著な存在となつてゐた有様を推察せしめるに充分であらう。

二、江戸幕府成立當時に於ける旅宿の面影

斯如く、元祿年代頃には、既に旅宿は何れの街道筋にも發達し、宿場町の中樞を成すまでの繁盛振りを示してゐたが、然しそれは當時まだ長い發達の歴史を有つものではなく、徳川政權の成立以後、殊に寛永年間に實施せられた參觀交代制度の結果、急激に發達せる陸上交通の情勢によつて齎らされた新時代的産物に他ならなかつたのである。記録をたづねて時代を遡れば遠からずして、營業としての旅宿は交通史の上から姿を消して了ふであらう。

慶長十四年フィリピン諸島長官の任滿ちメキシコへ歸航の途次、現在の千葉縣夷隅郡浪花村岸和田沖で難破し、救はれて後江戸城に於いて二代將軍秀忠に謁し、更に駿府に至つて家康に謁見した上、長崎までの旅を續けたドン・ロドリゴの日本見聞録中、江戸市街の有様を記して、

又旅館のみにて其間に他の家を挟まざる數街（註）旅籠町あり。

とあるのを見れば、江戸に於いては慶長年間既に旅宿が軒を並べて繁盛してゐた有様を窺はれよう。當時未だ參觀交代の如く、諸侯の江戸參府を強制すべき制度は實施せられなかつたが、既に徳川氏の政權は確立して、政治的または儀禮的目的を以つて江戸へ參向する大名や其家臣などが少くなかつたであらう。また江戸の膨脹繁榮に伴へ、少くとも、近隣の諸國から移入せられる物資が多く、隨つて商人などの江戸に出で、滞在する者なども少からぬ數に上つたことであらう。それ等の必要が夙く江戸市内に營業としての旅宿を發達せしめる原因となつたものと思はれる。然しそれはまだ決して全國的に發達せるものではなかつた。そしてまた元祿時代などに於けると同じ制度の旅宿であつたかどうかも明かでない。

彼の京都滞在中の記述にも、

蓋し市内に在れども（註）三十三間堂の（註）予が旅館より甚

だ遠くして、遅くなるまで旅館に還ること能はざりき、

と云ひ、旅館の文字を見出されるが、それが營業を目的とせる旅館であつたものか、それともまた當時の貴人等が行旅の途次一般に宿泊する習慣であつたやうに寺院かまたは接待を命ぜられた豪族の邸にでも宿泊したものが明かでない。彼は大阪ではサン・フランシスコ派の教師の住院を宿所としたし、⁽¹⁾駿府に於ける宿泊に就いては

彼の家臣(彼とは家康をいふ)一人此町の門に來りて予を迎へ、予が宿泊すべき旅館に案内せり。

と記してゐるが、後に述べるところによつて知られるであらうやうに、當時、外國の貴人を接待すべく、⁽²⁾其宿所に宛てるやうな設備の完備せる旅館が發達してゐたものとは考へられないから「旅館」といふのは恐らくは接待役を命ぜられた重臣等の邸宅か富豪の邸宅でもあつたであらう。

「註」(1)「ドン・ロドリゴ日本見聞録」

(2) 當時幕府がスペインとの貿易促進の意圖なども有つて如何にドン・ロドリゴを好遇したかは彼がその旅行記中に「予

は五日間旅行して終に駿河に着きしが太子(秀忠のこと)の豫告により名所に於いて大いに款待せられたり」と記してゐるのを見ても知られるであらう。

ドン・ロドリゴ等遭難イスパニヤ人の一行がメキシコに歸着すると、その答禮大使を兼ね、當時イスパニヤ人の間に現實性を帯びて物語られてゐた「金銀島」探検の使命を負つて慶長十六年日本に來航したビスカイノは、江戸滯在中御船手向井將監の邸宅に宿泊したが其接待振りについて次の如く記してゐる。

彼等父子(將監父子)は大使並部下を迎へ一同を宿泊せしめ、十分に晚餐を供し、番に父子のみならず、其家に在りし二百餘人の家臣等も亦大なる愛情を示したり。(「ビスカイノ金銀島探検報告」)

翌日には、指定せられた他の宿舎に入つて休泊したがその宿所に就いては、

翌土曜日の朝大使は部下一同と共に指定せられたる家に赴きたり。甚だ大ならざるも同所の最良なるものゝ一な

(同上)

り、同家は好き位置にあり、石を以て作り瓦を以て覆ひ、火災に對して安全なるが、當市に於いては家の多數は木を以て作り、忽ち焼失するを以て之を指定せるなり。此家は國風に從ひ甚だ好き裝飾を施したり。(同上)

と書いてゐる。それが何人の邸宅であつたかは明かでないが、營業を目的とする旅宿ではなく、塀をもつて圍まれた諸侯の邸宅の一つであつたことだけは容易に想像されよう。また宿泊中の食物に關して、

翌日皇太子(秀忠のこと)の御殿より料理番二人、多數の僕を伴ひ、器具並に牝鶏、鶉、鳩、鼈及び各種の魚類を携へ來り。魚類は神が人類の爲め海中に造り給へるもの、悉く多量に當市に在り。イスパニヤの諸港中一も之及ぶものなし。料理場は二ヶ所を設け、一ヶ所にては我が國風の食物を、他の場所にては其の國風の食物を調理せり。九時には前記の貴族、食物を如何に調理せるか一切其の命令せる通りに調ひたるかを見ん爲め、密に駕籠に乗りて來りたれば、大使は彼を招き當日は其客となしたり。

と述べてゐるのを見れば、江戸に於いてさへも未だ外國貴賓に供すべき適當な食物を(日本料理)調理し得る旅宿または茶屋(料理店)がなかつた有様が明かに窺はれるであらう。そしてこれを七、八十年の後ケンペルが宿場の旅宿につき記述してゐるところと(後文参照)比較すれば、日本に於ける旅宿の發達が極めて急速であつた事實を知り得よう。

ピスカイフはまた江戸より駿府に向ふ旅の途中に於ける宿泊について屢々記述してゐる。例へば藤澤に於ける宿泊に關しては、

我等は十分に馬匹其他の供給を受け、宿舎世話として老船舶司令官を同行し、木曜日浦川を出發し、此日藤澤と稱する町にて夜を過したり。同所には一同の爲め十分に旅館及び食物の準備ありき。(同上)

と記し、次の日小田原の宿泊に就いては、

金曜日我等は小田原の市に着きて夜を過したり……。當

市は皇太子(秀忠のこと)の書記官(「社」大久保相模守忠隣)の所領にし

て、大使を大に歡待すべき命令を與へ置きたるが故に、當所の旅館及び食事の準備は前よりも充分なりき。(同上)と書いてある。何れも旅館の文字を使用してはゐるが、然

し江戸に於ける宿泊の場合から推察しても、それがそれ等の宿場や城下町に存在してゐた營業旅宿であつたものとは考へられない。恐らくは江戸宿泊の場合と同様、大名の邸宅や豪族の邸宅などが宿所として豫め準備せられてあつたことであらう。駿府に到着してからの宿泊につき、

市内には澤山の食物及び乗替の馬匹を用意せり。……我等は宮城(駿府城)より遠からざる甚だ好き家屋に宿泊せり。皇帝(家康のこと)は直に使者を遣はして、大使に歡迎の辭を述べ、長途旅行の疲勞を休むべく、又其來着を喜び、書記官をして彼に通知せしむべき旨を傳へしめた(同上)

と記述してゐるのも、同じ事態を偲ばせるに充分である。

ビスカイノの旅行記に於いて特に興味深いのは、江戸時

代に於ける他の外國旅行者の見聞が何れも江戸長崎間に關するものに限られてゐるのに反し、彼は東北日本に向つて旅する機會を有つたがために、江戸以北に關する記述を含むことである。

慶長十六年十月二十二日(我が九月十七日)ビスカイの一行は、幕府から重臣の連名せる左搦の通達文が示すやうな手厚き保護と便宜とを與へられ、東北日本の諸港灣を測量すべく奥州へ向つて旅立つた。

一、急度申入候 仍此南蠻人於日本諸浦(脱字あるべし)之由可申之旨上意候

一、對南蠻人、下々狼藉無之様に可被付事

一、御領分エ罷著候ハバ、海陸何ニテモ、被相添案内者

ツキツキ迄可有御送事

一、黒船ツナキ申候湊見申ニ付而、小船入候由申候者、被仰付御借可被成事

右何も無御油斷事尤令存候 恐々謹言

慶長十六年九月十五日

青山圖書介

安藤對馬守

酒井雅樂守

本多佐渡守

以つて未だ鎖國的傾向の微塵もなかつた當時の情勢が窺はれるであらう。また通牒文の文言の節々に、未だ諸侯に對して完全な命令者と成り切つてゐなかつた江戸政權の立場なども反映してゐて興味深いものがある。

それは兎も角二十二日江戸を出發した一行は行程七里にして越谷に宿泊した。(原書にはOginoとあるが越ヶ谷であらうといふ)
同所の宿泊について

同所にては金錢に對し、宿泊並食事を供したり、何んとなれば朱印(前掲通牒文)は此等の村の町奉行に宛てたるものにあらずればなり。(ビスカイノ金銀島探検報告)

と記し従前と異り、宿泊に對し金錢を支拂へたる事實を傳へてゐるが、この場合も恐らくは營業旅宿ではなく、土地の役人等の計へで富豪の邸宅か、寺院にても宿所に充てら

れたことであらうと推察される。宇都宮の通過につき。(領家は奥平)

大使は(ビスカイノ自身のこと)着後通譯をして殿下の朱印を携へて同市に到らしめしに、領主は旅館の準備をなし、必要な物一切及馬匹を無料にて給し、又數日休息せんと欲せば歡待すべしと傳へたり。(同上)

と記し、續いて蒲生秀行の城下會津に到着して、土曜日(二十九日)若松の市に着きたり。此地を領する主は飛驒殿にして……太子(秀忠將軍)の書翰を得て旅舎並大使及隨員の食事其他必要品を準備せしめ、執政に必要な物一切を供給することを命じたり。(同上)

と記せる記述の中に見出される「旅館」または「旅舎」も城主等が臨時に準備せる特殊な宿泊所であつて、決して市井に發達してゐた旅籠屋でなかつたことが、前後の事情から明かに窺はれるであらう。米澤の上杉景勝も幕府からの通達に接して旅舎其他必要なるもの一切を準備して「己の家に入る如く領内に入るべし」と一行に傳達せしめ、仙臺の

伊達政宗も同様旅舎をはじめ萬端の設備を整ひて歓迎の意を示しビスカイノをして、

全旅行中最良にして十分なるものたらしめ、次で使者をして歓迎の意を叙べしめ、其領内に來りしことを喜び、之を歡待して、舟馬匹其他旅行に要する物を悉く給すべき旨を傳へしめたり。

木曜日、晝の十時頃王は多數の貴族及び兵士を出し、大使として（我等を）宮中（青葉城）に迎ふることとし、接伴の鄭重なることは江戸に於けると同一なりと言ふことを得べし。

と言はしめてゐる程であるが、その「旅舎」が營業として城下町に存在してゐた旅館または旅館屋でなかつたことは、他の場合と同様明かに肯かれるであらう。随つてこれ等の外國旅行者の紀行中隨所に旅舎または旅宿等の文字が見出されるからと云つて、江戸幕府創業の當時既に、元祿以降に見られるやうに、城下町や街道の聚落に設備の整つた旅宿が發達してゐたものとは考へられないであらう。彼

等は多くの場合、右に述べて來た所によつても知られるやうに、彼等のために臨時に準備せられた宿所（寺院、諸侯の邸宅、富豪の居室等々）に泊つて旅を續けたものと考へなければならぬ。彼等は行く先々で諸侯の歡待を受け、安らかな旅を續けたらしく、それを後代のケンペルやシールボルトなどが、鎖國主義の鐵則に縛られ、小吏等の陰險な監視の下に旅した窮屈な旅行と比較すれば、其處に時勢の相異がまさしくと窺はれる。然しさうした歡迎づくめの彼等の旅も決して無償ではあり得なかつた。彼等が、諸侯から受けた歡待に對して、それに相應しき對償を拂はなければならなかつたことはいふまでもない。例へば伊達政宗の歡待に對する報償に關して、

相當なる贈物をなす必要ありと考へ、金襴、ロンドン製の上等黒羅紗、其他三百下カド餘の贈物を携へて城に到れり。（同上）

と述べ、また蒲生秀行に對する贈物について、必要に迫られて大使は羅紗、金襴、手袋、靴、其他相當

の贈を携へたり。(同上)

と記してあるなどによつても、明かにそれが知られるであらう。諸侯に對する謝儀または贈物は彼等にとつて輕からぬ負擔であつた。宇都宮に到着して城主、奥平大膳大夫家昌から歓迎の意を表し、旅の疲れを息めるため數日滞在すべきことを勧められた時(前文參照)これを謝辭して、同所を通過しわざ／＼氏家まで來て宿泊したのは、同書が、

司令官(ビスカイノのこと)は此申出を感謝し、冬期寒威加はる際高緯度の地に行くことなれば、逗留することは受けたる

命令を異す上害あるべし。然れ共歸途は逗留すべしと答へ、又訪問せざるを謝せり。これ當國にて諸侯を訪問するには必ず羅紗其他百タイス以上の價の贈物を携へざるべからず。多數の諸侯在るに依りセゴビヤ及びフローレンス(北イスパニヤ及北イタリヤの都會で有名な織物の産地であつたといふ)を所有するにあらざればこれをなすこと能はざるが故なり。

といふビスカイノの悲鳴を傳へてゐることによつても知られるやうに、贈物の費用を節約するがためであつたのであ

る。また東海道の旅行に就いて、

我等は都の市(京都のこと)に向つて出發し、途中十分の給與を受け、多數の甚だ大なる町を通過せり。中には城を有し、領主の居たるもありしが、司令官は贈るべき品物を所持せざりしが故に、彼等を訪問することを避けたり。

(同上)

と記してゐるのも同じ事情を傳へるものである要するに彼等の宿泊に對する報償は決して廉價ではなかつたのである

然し當時の街道筋に、如何なる様式の旅宿も營業としては全く存在しなかつたと考へるならばそれは甚しく正鵠を失するであらう。

參觀交代制の實施せられた後の如く、定期的ではなかつたにしても、その頃既に全國の諸大名は幕府への忠誠を表示して、不逞の疑惑を避けるがために屢々江戸または駿府へ參向した。そして彼等の往復は多くの家臣群を引具しての旅行であつた。例へばドン・ロドリゴが駿府に於いて家

康に謁見した際、殆ど同時に駿府に参向して、貴重な贈物を捧呈したある有力な大名の如きは三千人の供を率へてゐたといふ(ドン・ロドリゴ日本見聞録——誇張があらう)。また一面大阪、京都、堺、江戸等をはじめ多くの主要な都市に於いては、商店が軒を連ね、商業が殷賑を極めてゐたことは、それ等の外國旅行者が何れも一樣に記し傳へる所である。そうした多勢の家臣群を率へての大名の平和的旅行は陸上交通を急激に發達せしめる重要な原因となつた。また商業の勃興が必然に、道路交通の發達を促し庶民群の旅行を一般的ならしめたであらうことは容易に肯かれる。⁽¹⁾

「註」 それ等の點に就いては「道路の改良」掲載の拙稿「江戸時代の道路を往く」参照

さうした事情の下に在つて、これ等の旅行者のために何等かの方法仕組によつて宿泊の場所を供すべき施設が全く存在しなかつた筈がない。さうした施設は戰國時代に於いても室町時代に於いても、遡つては鎌倉時代に於いても更にそれ以前に於いても其存在を跡附け得るであらう。

(これ等の時代に關しては他の機会に考察するであらう) 多數の旅人の往還の在る所、それは必然に發生しなければならぬものであるからである慶長十四年の旅行記でドン・ロドリゴが東海道筋に關し、旅客多數なれども、途中無人の地に宿泊することなし。……此の如く廣大にして交通盛に又街路及び家屋の清潔なる町には世界の何れの國に於いても見るることなきこと確實なり、此地の旅行は甚だ愉快にして至る處飲食物多く、殆ど無料にて之を供給す、又旅館に豫告して食物の準備を命ずる必要なし。何となれば日中何時にても求め又望む物を得べきが故なり。

と記述してゐるのは、既に旅館が次に述べるが如き第一期ともいふべき發達の階程より進んで、旅行者のために食物をも供して宿泊せしむる施設にまで發達しつゝあつた面影を偲ばせるものでなければならぬ。即ち現在目前に見る旅館と同じ制度の旅館が、少くとも、當時道路交通の最も發達せる東海道筋に於いては、次第に出現しつゝあつた事實を想見せしめるのでなければならぬ。